

# 東日本支部だより

2016年3月8日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

## ■定例研究会のお知らせ■

### 今後の例会予定

3・4月に予定した卒論、修論発表会は、発表希望者が少ないため、4月に一本化する運びとなりました。4月以降、下記の日程で定例研究会を開催する予定です。ふるってのご参加、お待ちしております。

第90回 4月2日(土) 於:大東文化会館

卒・修論発表 \*詳細は下記をご覧ください。

第91回 6月11日(土) 於:国際基督教大学博論発表

第92回 7月2日(土) 於:大東文化会館

シンガポール湘霊音楽社による「南音」の

レクチャー&デモンストレーション、及び研究発表

第93回 12月17日(土) 於:大正大学

3. 天理教の儀式音楽みかぐらうたの音楽的研究

松本 瞳 (東京藝術大学)

4. 明治後期から大正期にかけての薩摩琵琶の普及—吉水  
経和作《川中島》と永田錦心作《河中島》の比較を通して

— 曾村 みずき (東京藝術大学)

5. 植民地朝鮮における新派劇と音楽—流行歌《長恨夢歌》  
を中心に— 中村 ひかる (東京藝術大学)

6. 荻生徂徠による『論語』楽論の解釈

中川 優子 (東京藝術大学)

### ○修士論文発表

7. 箏曲点字楽譜の研究—点字楽譜「宮城道雄作曲集」の  
成立過程と翻刻を通して—

村山 佳寿子 (お茶の水女子大学大学院)

8. 『長崎ぶらぶら節』研究—お座敷唄から長崎くんちの演  
目へ— 安原 道子 (お茶の水女子大学大学院)

司会 井上 貴子 (大東文化大学)

### ◆東日本支部 第90回定例研究会

時 2016年4月2日(土) 午後2時~5時

所 大東文化会館3階 K302

(東武東上線 東武練馬駅 徒歩3分)

([http://www.daito.ac.jp/file/block\\_49512\\_01.pdf](http://www.daito.ac.jp/file/block_49512_01.pdf))

### ○卒業論文発表

1. サンノゼ・タイコの活動と理念—和太鼓との比較から—

土田 まどか (東京藝術大学)

2. じゃんがら念仏踊の伝承の研究—小名浜じゃんがら踊

友会の東日本大震災後の伝承を通して—

吉岡 美咲 (お茶の水女子大学)

※例年、支部だより6月号に掲載しておりました卒論・修論の傍聴記は、執筆者調整の困難など諸般の事情で、今期より修論のみ掲載することとしました。会員各位のご理解を賜りますよう、お願い申し上げます。

## ■定例研究会の報告■

### ◆東日本支部 第 88 回定例研究会

時 2015 年 12 月 5 日(土) 午後 1 時 30 分～5 時 05 分

所 東京藝術大学音楽学部 5 号館 301 教室

司会 尾高 暁子 (東京藝術大学)

#### ○研究発表

##### 1. 花街(かがい)の芸

—京都祇園甲部と京都北野上七軒を中心に—

中原 逸郎 (京都楓錦会)

##### (発表要旨)

花街は芸舞妓が芸(芸能と同義)を披露し、顧客を応接する場である。近年、地域創成の手段として花街再建の動きが高まる一方、経済的変化等による花街の衰退につれ、芸の披露の場も減少し、花街の芸の全体像をとらえることが難しい状況にある。芸は披露される瞬間から消えてゆくため、演じ手等関係者の強い意思で継承していくことが重要であった。しかし、そこには西洋音楽擁護のために端唄、浄瑠璃、清元等を品位がないと糾弾した谷田部良吉(1851-99)の活動等やその反対に若柳吉兵衛主催の大正期の家庭舞踊のように邦楽や舞踊を普及活動もあり、花街の芸は様々な評価の中で継承されたと考えられる。

花街の芸に関しては郡司正勝が 1977 年「座敷の芸」と「舞台の芸」に分類したが、その実態を把握することを本稿の目標とした。調査地には幕末には既に存在し、近年他の花街とともに地元の無形文化遺産に指定(2014)され、今も様々な芸を継承している京都市の祇園甲部(東山区)と北野上七軒(上京区)を選んだ。

調査の結果、地域性に基づき両者の花街の芸に違いはあるものの、(1)舞台舞踊の基礎となる芸、(2)座敷芸、(3)拳、ゲーム等座敷内遊戯、(4)おねり、盆踊り等座敷外遊戯に分類し、説明することができた。

また、座敷芸においては端唄が多く取り入れられ、元々長唄や清元であっても、上演時間は 7 分程度未満に「はしよる(短縮される)」ことや、有名曲の一部を抜粋する模倣(本歌取り)が起こることを、長唄曲「越後獅子」と上七軒の俗謡「赤ゲット五段返し」との比較で示した。また、花街の地域性の違いから、模倣曲からさらに新たな歌詞の編成や楽曲への変化が起こりやすいことがわかった。これは、郡司の指摘する花街の地方性の例証であり、山口修のいう芸の転位の概念で説明することができよう。山口は音楽をテキストと考え、テキストを支える身体や場、時、機会等の条件をコンテキストと呼び、コンテキストが変化する過程と結果を脈絡変換と呼び、脈絡変化の中で楽曲が異なる形に配置換えすることを転位と呼んだ。端唄の歌詞が変えられる過程は転位に当たると筆者はみる。

花街の芸は、宴席を盛り上げることを本務とし、全国各地に多くの素材を求め、花街ごとに特徴ある芸を生んだが、単に宴席を盛り上げるものだけではなく、長く地域で継承され、教訓的に継承されている場合があることを調査から得た。《キーワード 座敷芸、石田民三、地方性》

(傍聴記：木岡 史明)

和装で登壇した中原氏の発表は、文献分析・聞き取り調査・独自資料をもとにして、主に上七軒における座敷での芸に焦点を当てた考察である。冒頭では、フィールドワーク映像をもとに、芸妓の風習や芸などが紹介され、花街風景を垣間見せてもらった。この鉄壁で守られた花街という閉鎖的な世界は、静に衰退の一途を辿っている。積極的な体系的記録を困難としたのも、一つにその閉鎖性があり、今発表にて花街の芸の一面が明らかされたことには意義がある。

だが、「花街の芸の大系化」とするならば、宴席や饗宴の主である客と興を添える芸妓、そしてその両者が織り成す空間という三視点から考察されたい。座敷という空間では、芸妓を含めて互いが知る中で執り行われており、その芸は

不特定の観客を相手にするものとは異とするように思う。更なる研究の深化が期待される。

質疑応答では、生活に根ざした流行歌などに対する気質がなかったことなどが本発表の動機として答えられた。当事者における「替歌」という認識についての質問およびコメントが出た。

## 2. 『京城新報』及び『京城日報』を通して見た二十世紀初頭の朝鮮における日本伝統芸能の様相 —1907年から1915年までの記事を中心に—

李 知宣 (韓国・淑明女子大学)

(発表要旨)

近年韓国では日本統治時代の朝鮮における日本伝統芸能の実態に関する研究や関連記事の目録が発表されているが、日本にはほとんど紹介されていない。本発表では朝鮮で発刊された日本語新聞『京城新報』及び『京城日報』の1907年から1915年までの記事を調べ、日本文化の形成期である二十世紀初頭の朝鮮における日本伝統芸能の様相を明らかにした。

『京城新報』及び『京城日報』における伝統芸能関連の記事を分類すると、1)公演(営利目的の劇場公演、同好会の演奏会、慈善演芸会、行事余興、陸軍軍楽隊の音楽会、劇場事情)、2)教習(教習広告、楽譜広告)、3)花街の芸(京城検番・中検番の芸)、4)人物(来朝した音楽家・団体、京城居住の専門家)、5)内地便り(皇霊祭や即位大典における雅楽、天覧能など)に分けることができる。

1907年から1915年まで京城(ソウル)に存在した日本人経営の劇場は16ヶ所で、そのうち日本伝統芸能の公演を行っているのは11ヶ所(2ヶ所は寄席)である。劇場で多く演じられた分野は、浪花節、歌舞伎、落語、義太夫節、講談、源氏節の順であり、そのほか筑前琵琶、能楽、今様能楽、人形芝居、日本舞踊、芸妓芝居の公演もあった。公演

の数は、韓国併合により日本人の急増した1910年に大きく増え、また韓国併合5年記念の朝鮮物産共進会が行われた1915年に急増している。公演は主に来朝した音楽家や団体が担当している。

京城にあった邦楽の同好会としては、謡曲(9種)、義太夫節(6種)、長唄(1種)、琵琶(4種)、三曲(2種)、邦楽洋楽連合(1種)の分野が確認される。このうち、もっとも早い時期に形成された分野は謡曲(1906年10月頃)であり、次は義太夫節、長唄、三曲、琵琶の順である。同好者の数からみれば、謡曲(600-700余名)や琵琶(450余名)がもっとも多い。各団体の師匠のうちには、筑前琵琶の鶴崎賢定、箏曲の中菅道雄(宮城道雄)、長唄の第七代芳村伊三郎の名もみられる。

京城では、浪花節の公演が多かったこと、様々な伝統芸能の稽古が行われ、温習会を定期的に開催していたこと、謡曲の愛好者が多く、また西洋楽器による日本音楽の演奏が行われていたこと、公演や同好会は一時的に来朝した人や朝鮮に移住した日本人芸術家が主導していたことなど、京城の日本人社会における伝統芸能は、内地と大きな時間の差を置かず同様な形で展開していたと言えよう。

(傍聴記：金 志善)

本発表は、在朝鮮で発刊された日本語新聞であった『京城新報』(1907～1912)と『京城日報』(1906～1945)の両新聞において1907年から1915年までを中心に日本伝統芸能の記事を抽出し、その内容から当時の日本伝統芸能の様相を明らかにしようとしたもので、すでに韓国や日本で数回にわたり発表されたものをもとにしている。本発表は、いままであまり注目されてこなかった日本外地(朝鮮)における邦楽の実態の一部を新聞記事から把握しようとしたもので大きな意義があり、研究発展にも期待される。質疑には、発表資料の目録には「西洋音楽」が含まれているのにタイトルには「西洋音楽」が入っていない理由、日本の伝統芸能に朝鮮人聴衆はいたのか、日本人が朝鮮音楽の公演を観

た事例はあったのか、などがあった。

### 3. イスラム教神秘主義アレヴィー派の儀礼音楽の変容 —「ハジユ・ベクタシュ・ヴェリ追悼祭 Hacı Bektaş Veli Anma Törenleri」の観察を通して—

鈴木 麻菜美 (国立音楽大学大学院博士後期課程)

(発表要旨)

本発表の主軸となったのは、伝統的な「場」から解離した音楽の変容である。例として取り上げたイスラム神秘主義の一宗派であるアレヴィー派は、宗教儀礼ジェムにおいてイスラム教の儀礼においては忌避されているはずの音楽、特に民俗楽器サズや、宗教的内容を含んだ民謡を用いる。そのような宗教儀礼をはじめとする慣習の違いが要因の一つとなり、アレヴィー派が多く居住するトルコにおいては、多数派であるスンニ派などから異端視され、そのことにより社会的マイノリティとして扱われてきた。

アレヴィー派の儀礼音楽は、本来それぞれの村単位程度の小さなコミュニティの中で行われてきたものである。しかし昨今、その音楽や舞踊は、一般民衆やメディアへの公開、儀礼の場から離れた演奏など、行われる「場」や「意義」がかつてより広がりを見せている。その要因として、現代における信徒の都会への移動やコミュニティの拡散、情報伝達手段の発達などによるコミュニティ間での交流、1959年のEEC(その後のEC及びEU)成立にともない、ヨーロッパの共同体加盟を目指してきたトルコ政府が1980年代以降に示した政策転換によるマイノリティへの緩和策に起因するアレヴィー派の社会的立場の変化などが考えられた。このことにより彼らの文化にも変化がもたらされ、「宗教儀礼の一部」としてのみでなく、アレヴィー信徒による外部への「アイデンティティの提示」や「コミュニティの象徴」として音楽や舞踊が活用されていると推察された。

本発表ではそのような変化を表している例の一つとして、

1964年以降、毎年西暦の8月にアレヴィー派の聖地ハジユベクタシュ村で行われる記念祭「ハジユ・ベクタシュ・ヴェリ追悼祭 Hacı Bektaş Veli Anma Törenleri」での使用例を検討し、現代におけるアレヴィー派やその音楽の社会的状況に関する文献等の資料による情報を基礎として踏まえた上、記念祭でのアレヴィー音楽の使用例とあわせて考察した。

(傍聴記：飯野 りさ)

今日、トルコ共和国における音楽や音楽関連の文化の研究は内外でも一定の成果がある。鈴木麻菜美氏の研究発表は、その中でもかつては異端、現在では旋回舞踊で知られているアレヴィー教徒の儀礼、特に聖人の追悼祭での儀礼に関する報告であった。現地調査での録音・録画を使い、トルコの政治や社会の変化の中で「アレヴィー文化」の大衆化や観光化等を説明し、門外漢には親切な内容であったが、その一方で、音楽それ自体の変容に関しては印象論的な議論のみで、さらなる研究の必要性を感じた。アレヴィー教徒に関する研究は、日本においても近年注目されており、方法論的に近い例としては、パフォーマンスとしての旋回舞踊を考察している米山知子の舞踊人類学による研究がある。秘儀から公開の儀礼へと変化した「場」の変容に着目した米山の考察は、鈴木氏の着眼点にも近い。音楽を考察の中心に据えた同氏の研究を様々な先行研究群の中でいかに位置付けるのかが、今後の課題となるだろう。

## ◆東日本支部 第89回定例研究会

時 2016年2月6日(土) 午後1時～4時30分  
所 東京藝術大学音楽学部練習ホール館第一ホール  
司会 伏木 香織 (大正大学)

### ○研究発表

中世の笙の「調子」「入調」

- (1)「調子」「入調」の音楽構造
- (2)豊原氏の秘曲化の前後
- (3)二つの「太食調入調」とその復元試演

発表：

遠藤 徹 (東京学芸大学)  
比嘉 舞 (奈良女子大学博士研究員)  
三島 暁子 (上野学園大学日本音楽史研究所研究員)

演奏：

宮田 まゆみ (国立音楽大学、非会員)

(発表要旨)

笙の「調子」は六調子すべてにあり、舞楽の登退場の音楽や管絃のはじめなどに用いられる。「入調」は現行では無人退出の際に「調子」の途中から吹く場合を指し、別曲があるわけではない。しかしかつては「調子」とは別に「入調」という曲が伝えられていた。本発表はこの伝承が失われた「入調」について、音楽構造、史的展開の二つの側面から考察したもので、(1)「調子」「入調」の音楽構造、(2)豊原氏の秘曲化の前後、(3)二つの「太食調入調」とその復元試演の三部で構成した。

(1)では先ず調子とは別曲の入調を収録している、豊原利秋撰『古譜呂律卷』(利秋譜)、豊原龍秋撰『鳳笙呂律卷』(龍秋譜)、豊原兼秋撰『大食調曲譜』(兼秋譜)の三種の古楽譜について、成立や伝本等の問題を確認し、その上で調子と入調の音楽構造を比較し、入調は同じ調の調子と相似

形であること、調子が合竹と特有の手からなるのに対し、入調では合竹は用いず、調子を抜粋したような、より旋律的な作りになっていること等を実演を交えて提示した。次に、龍笛古譜では枝調子の調子譜があるのに対し、笙の古譜では六調子に限られ、枝調子を合体した作りになっていると見られること、一方で原調の均の音組織に由来する装飾法の痕跡が認められること等を、前者は壹越調を例に、後者は(トモ調)を例に提示した。そして、これらのことから笙の調子・入調は唐から伝えられたものを原型にしつつも、平安時代の日本人の手が加わっていると私の私見を述べた。(遠藤)

(1)の後半では、「調子」の中に現れる名称のついた手・句にどのような種類があり、またどのような資料に名称が記されているのかを整理し、その中から(蜻蛉がへり)や(トモ調)(ヲウ音)を取り上げ、旋律の構造や演奏時の手の動きと名称の関連性を検証した。更に太食調「調子」特有の句である(荒吹)の特徴的な部分は「入調」にも頻出しており、「調子」「入調」には共通点があることを指摘した。(比嘉)

(2)では、先ず古記録、儀式書、楽書等の記述に基づいて、平安時代の調子の実際の用法を提示し、①舞楽の無人の出入、②御遊等の管絃のはじめ、③節会等の儀式的参音声またはその前奏、④独奏の4種があることを指摘した。その中で大法会で用いられる入調と入調の舞の関係についての私見にも言及した。次に、『続教訓抄』等の分析から、笙の家としての豊原氏は時光にはじまり、時光が調子や入調の相伝を体系化し、入調を秘曲化した可能性が高いことを考証した。更に調子も入調も時光以前から存在することから、豊原氏以前の笙の相承の実態を追い、丸部利茂、大戸朝生等、雅楽曲の新作、改作に多く関与した和邇部(丸部)氏、大戸氏から平安前期の雅楽寮笙師に任官されている例が見られる点に注目した。(遠藤)

(2)の後半では、時光以降の豊原氏による入調の相伝について報告した。正長元、2(1428、29)年に行われた後小松院より豊原重秋への「陵王荒序」「入調」返伝授に注目し、

これらは祖先時元の足柄山秘曲伝授の説話に倣うものであり、豊原家嫡流の正統性を裏付けるものとして機能した点を指摘した。そしてこうした例から、「入調」伝授の下限である長祿3(1459)年の記録についても、実態を伴うものであったと推測した。(三島)

(3)では宮田まゆみ氏が、現行の太食調調子、兼秋譜の太食調入調、龍秋譜の太食調入調の実演を行った。兼秋譜の入調は利秋譜・龍秋譜とは異なり、調子と同様に合竹、特有の手などで作られるが、調子より1句少なく、調子にはない〈ミタレ(乱)吹〉〈テウノマトイ〉などの固有の手が含まれる。しかし兼秋譜の入調は利秋譜・龍秋譜の入調のような緻密さに欠けるなど疑点が多く、その真偽については慎重に考える必要があることを実演後に宮田氏との対話を通じて示唆した。

(傍聴記：スティーヴン・G・ネルソン)

「中世の笙の「調子」「入調」というテーマでまとめられた今回の研究発表は、質・量ともにたいへん豊かなものであった。遠藤氏が冒頭で述べたように、発表の範囲は中世という枠を超えて、平安初期にまで遡る話題も含み、内容的には音楽学・史学・文学の各分野からの多角的な視点を有していた。また、笙奏者の宮田氏は、前半の発表の間に適切に実演を交えて、後半に現行《太食調調子》および2つの《太食調入調》の復元試演を行い、例会は全体として〈理論〉と〈実践〉とが極めて効果的に出会った催しとなった。

特に目立ったのは、遠藤氏の統括力であった。氏にとって、笙の演奏伝承は長年の研究課題であり、上記の要旨の内容からわかるように、その成果は大きく実を結ぼうとしている。配付資料も充実しており、全体的にわかりやすかったが、欲を言えば、笙の譜字(乙、一、工、凡などの管の名称)と音高関係、楽器上の譜字の配列図などの参考資料があれば、笙の演奏体験のない者にとっても、なおわかりやすかったかもしれない。また、復元に強い関心のある者として言うと、その根拠となった史料の全体を、配付せずとも、

何らかの形で復元試演の間に提示していただきたかった。復元の「実証性」を高めるために、その提示が必要不可欠ではないか。

フロアからの質問は2つあった。1つは比嘉氏の用いた「手」という表現について、それが奏者の手・指の動きのことなのか、特徴的な旋律部分なのか、という疑問であった。比嘉氏は『體源鈔』における使い方自体の曖昧さを指摘したが、「手」のような多義語の場合、分析において明白な定義で分類を試みるべきではないか。

もう1つの質問は、同じ調(例えば太食調)の《調子》と《入調》の音楽構造の相似性に関連して、《調子》を「抜粋したような」《入調》が秘曲になった理由に対する疑問であった。遠藤氏は、曲の難易度とその秘曲化には必ずしも関連性がなく別の事情を考えるべきであるとし、また、「憶測」と断りながら、平安初期からすでに存在した《入調》が、やがて演奏されなくなり、それを豊原時光の時代(11世紀中頃)に秘曲にしたのでは、との見解を示した。実は、これとは対照的な印象を与える発言、たとえば《入調》が《調子》の旋律的な特徴を踏襲するとか、《入調》が《調子》の真髄を取り出したものだ、といった発言が発表者側に多かった。問題は《調子》と《入調》の成立の先後関係だ。筆者ネルソンは、かつて《平調入調》の復元試演を監修したことがあり、その経験から言うと、《平調入調》の構成音はすべて唐の音楽理論の平調に合っており、一方《平調調子》第五・七句の「盤涉調音」(盤涉調に「転調」した部分)に、盤涉調に特徴的な「美」管(G#)が現れる。同じ基本構造でありながら《入調》に「美」がないのは、省かれたと考えるより、平安時代の音楽家によって《調子》に加えられたと考えた方が自然ではないか。

ともあれ、遠藤氏と宮田氏の生産的な協力関係がこれからも続くようで、今年11月には平安末期成立と思しき、陽明文庫蔵の調子譜を根拠とした、全六調の復元試演が予定されている。《調子》・《入調》成立の先後関係に関する更なる示唆が得られるのではないかと、大いに楽しみである。

## ■第27回(2015年度)小泉文夫音楽賞決定■

本賞は故小泉文夫氏の功績を記念して設立されました。その第27回受賞者と授賞理由が以下のとおり決定しましたので、お知らせ致します。

①オタナザル・マチャクボフ(ウズベキスタン国立音楽院教授):中央アジア音楽の歴史研究を通じて、民族音楽学に貢献した功績に対して。

②マーガレット・カルトミ(モナシュ大学教授):東南アジアにおける音楽文化の多様性を、歴史的並びに音楽様式学・楽器学的観点から明示した功績に対して。

授賞式、記念講演等については、以下の小泉資料室サイトをご覧下さい。

(<http://www.geidai.ac.jp/labs/koizumi/award.html>)

(同賞運営委員 尾高 暁子)

## ■定例研究会発表募集(12月例会)■

東日本支部では、会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております。発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、今回は7月1日必着で、東日本支部事務局までお申し込み下さい([tog-higashi@freeml.com](mailto:tog-higashi@freeml.com) あてメール添付か郵送)。

目下、会場と担当要員確保が難しいため、原則として12月定例研究会のみ、お申し込みをお受けする方針です。ただし、ご希望多数の場合、9月特別例会を變則的に追加開催する可能性も検討しておりますので、通例より申し込み締め切りを大幅に繰り上げました。その旨予めご了承下さい。

尚、メールご利用の方で、発表希望を提出後1週間経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

## ■会員の声 投稿募集■

1. 次号締切: 2016年6月5日 (6月下旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

学会本部事務所(郵送、Fax またはメール)

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号

Fax: 03-3832-5152、E-mail: [tog.higashi@gmail.com](mailto:tog.higashi@gmail.com)

3. 字数・書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)

4. 内容:会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

※原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきますことがありますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

## ■編集後記■

今号の支部だよりでは、昨年 12 月及び本年 2 月の例会に行なわれた研究発表の報告を掲載いたしました。ご多忙中、原稿執筆にご協力下さった方々にこの場をお借りして御礼申し上げます。

東日本支部では、今後も研究発表や企画など皆様からのお申し込みをお待ちしております。本誌での「会員の声」にも情報をお寄せいただき、積極的にご活用ください。次号の発行は 6 月下旬を予定しております。(T)

\*\*\*\*\*

発行：一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集：尾高暁子、澤田篤子、

近藤静乃、田辺沙保里、福田裕美

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com

\*\*\*\*\*